中日新聞
中部日本新聞
発行所
© 中部日本新聞社 1970
名古屋市中区丸の内三丁目12—21
（郵便番号 460）
電話（大代表）名古屋（201）8811
郵便振替口座　名古屋　10番

特集

自然を生かそう

自然を大切にしようという運動が始まっている。自然や緑を大切に……いい古されたことばである。しかし、私たち人類は、そして、とくに日本人は、このことばをお題目のように唱えながら、実は決して自然を大切にしてこなかった。太平洋ベルト地帯など人々がもっともたくさん集まるところでは、まるでハチの群れのように、身の回りを鉄やセメントでかためることに専念してきた感がある。近ごろ、大都市周辺でも自然の斜面を残しながら住宅が建てられるようになり、ハイウエー建設の半面で東海自然歩道の計画が実現するようになったのも、こうした反省に基づいている。北アルプスのふもと長野県穂高町では開発に文化人のアドバイスを求め、真剣に耳を傾けようとしている。各地で芽を出してきたこうした動きを特集した。

残したい静けさ、美しさ

井上靖（いのうえ　やすし）

梓川と　高瀬川の合流点は美しい。高瀬川が大きいカーブを描いて、梓川の横っぱらに流れ込む、その流れ込み方もいい。槍ケ岳の東面と北面に発する二つの川が、それぞれ大きくう回して邂逅（かいこう）する邂逅点は、まさにこのようなものでなければならぬという気がする。はげしく、大きく、おおらかである。

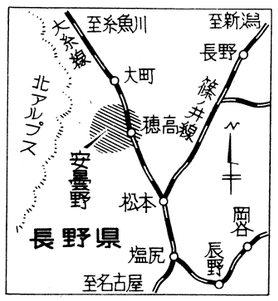
この合流点に沿って、穂高町をのせた松本平が広がっている。五月の田野には紫色のライラック、黄色のヤマブキ、緋色のボタン桜、白いコナシ、いろいろな花が澄んだ大気の中に点綴されている。そして、この平原の背後に雪の北アルプス連峰がびょうぶのように置かれてある。常念、大天井、燕岳、いずれも頂きはまだまっ白だ。ちょっとこれ以上ぜいたくなびょうぶはないだろう。

初夏の　穂高町はいい。穂高明神池に奥ノ宮を持つ古い由緒の穂高神社がある。戦国のドラマに色どられた小岩岳城趾がある。たくさんの古墳がある。美しい宝石箱のような松尾寺がある。冷たい地下水に洗われているワサビ畑がある。みんな若葉の緑の中にかくされている。簡単には見つけられぬように木立ちの中に仕舞われてある。それから、この町で生まれ、三十二歳でなくなった天才彫刻家荻原守衛の作品が並んでいる小さい美術館もある。明治時代にロダンに師事して女の裸像と取り組んだ人は、この町に生まれているのである。内部にはいると、パリのロダン・ミュウゼアムの一隅に立っているような気持ちになる。

北アルプス　連峰のびょうぶのすそをドライブしていると、いつまでドライブしていてもあきない。一帯の自然林には、まだ都会の騒がしさははいっていない。ここだけはいまの静けさと美しさを傷つけないで残しておきたいと思う。

川端さん、東山さんとごいっしょのドライブは楽しい。川端さんは小岩岳城趾の大岩石が気に入られ、長いこと、その上にすわっておられた。東山さんはワサビ畑を取りまいていたアカシヤの並み木の美しさをしきりに歎賞しておられた。それにならって、私も一つを選ぶとすると、私の場合は穂高神社のケヤキの巨木ということになろうか。その浅い緑の芽吹きの美しさは格別なものに思われた。

作家の川端康成さん、井上靖さん、日本画家東山魁夷さんが、日本アルプスのふもと、長野県南安曇（あずみ）郡穂高町の観光開発に進んで知恵を貸すことになった。安曇野に温泉を引き、民間資本を導入して別荘地を開発することになったとき、町の幹部たちは「自然の破壊者」になることを恐れた。この気持ちは大切である。川端さんは「氷壁」で上高地、穂高の自然を見事に描きとめた井上さんと、北アの自然をよく知る東山さんを誘って、このほど奥信濃へ出かけて行った。「穂高の自然に約束する会」の会長も引き受けた。いま、緑や自然を守る仕事がいかに大切か、川端さんは深く知っているから「ノーベル文学賞」の名前を貸したのだろう。「ここでは、人間は自然と合唱しなければいけない」——日本の美の探求者らしいことばだった。



北ア開発へ文化人も一役

雪をいただいた北アルプスの峰、峰。若葉をなでる風はさわやかで空はあくまでも青い。安曇野を一望できる高台から川端、東山、井上各氏（写真左から）は、自然とともに生きる道に思いをはせているかのようだった＝長野県東筑摩郡明科町で